

僕ら、小学高学年になった

ゴム動力のA1プレーンには、特別な思いを乗せた

高学年になって、少しばかりお金の掛かる遊びが登場。

大雄山線井細田駅隣接の新校舎に引越してようやく落ち着いた頃、学校ではゴム動力のA型プロペラ模型飛行機（A1プレーン）が流行った。

出来合いでなく、工作し組み立てることになる。

機体は細長い角型の木材一本が胴体。主翼と尾翼は、外形を竹ヒゴを使って型取り、薄い障子紙を貼った。垂直尾翼も同様の作業を経て胴体と合体。その際、主翼の位置が大事で、胴体の下に指一本をあてがってバランスをとりながら取り付け、主翼や尾翼の角度にもこだわった。

最後に、胴体の下に動力となるゴム紐を張らすようにして仕上げる。

完成し、いざ飛ばす時、ゴム紐の先端に取り付けた竹製のプロペラを指でぐるぐると回して絞り上げ、機体とプロペラを押さえて、ふいと前に押し出してやる。その時、やや下向きに押し出すのが、コツであった。

風に乗って、徐々に高度を上げて大きく旋回する我が機に、それぞれの思いを乗せたはずだ。

僕にも、戦時中の五才頃から、文字はいまだながら、飛行機ばかりを絵にして過ごしたようで、その一途さからか、飛行機乗りを夢見ていたのだろう、遠視になる訓練をし、文字が読めるようになってからは、零戦などに搭乗した撃墜王の酒井三郎さんの著書を読んでいた記憶がよみがえって、手にする模型飛行機には、格別な思いを乗せたような気がする。

皆と競争するように飛ばし合ったが、飛び過ぎて隣接する大雄山線の線路に落ちて無残となった機体があった。同級生

小島君自慢のA1だ。ありありとみんなの記憶に残った。

このころの友達が存在が

人間形成の基礎になって行く気がする

高学年になるにつれ、今道君のような得難い友が増えた。

佐藤君といった。勉強ができた上、育ちの良さを感じさせるお坊ちゃんとはかり思っていたが、戦争によるものかお父さんを早くから亡くして母子家庭ならではの苦勞をしてくれていた。彼は中学以降湘南高校に進学したため、疎遠になってしまったが、後年、東京の雪ヶ谷に訪ねて旧交を温めたことがあって、母親をとりわけ大切に作る家庭の温かさを感じたことがある。

また、下赤（隆信）君は満州から帰国後、お母さんに育てられ、さすが苦勞人と云っては失礼かも知れないが、配慮の深さはその辺にありやと思う。

彼とは数十年にわたるお付き合いをさせてもらって、今は何かと相談させて頂いている。この文面内容も、他の投稿内容も随所で彼の助言に預かっている。

戦乱で片親や両親も居ない生徒が周りには何人も居た時代であったのだ。

少し後、中学に進んでからの話を挿入したい。

ある女生徒が、担任の先生の許に寄宿していた。何故そうした境遇に置かれたかというと、その生徒は先の大戦で天涯孤独の身となってしまつて、転々として辿り着いた先が第三中学校（現白山中学校）。手を差し伸べたのが担任の先生である。

しかし、皆のそうした苦勞は後世に知ったことで、当時は何ら身の上のことには想像だにしない普通の日常を共にしてくれていた。後に一緒になった妻もビルマの戦地・インパールで父親を亡くしている。

それでも、みんな屈託が無かった。

何の遠慮も差別も無く学校生活を送れたのだ。気遣いがあったのかも知れない。

その配慮があつて、砂地に水が沁み込むように僕等を育ててくれたに違いない。今更ながら有難く思う。

戦後早々、英語塾に通つた

今道君と佐藤君そして僕の三人は、小田原の海岸に近い十字町に、英語の勉強を習いに通つたことがある。

今から考えても、戦後間もない頃に「英語」とは、随分とモダン？いや、ものすごく変わり身の早い行動だった気がする。

そのまま努力が続けば、少しは違つた人生になっていたかも知れないが、そうは行かなかつた。

後の中学生になつたころ、何のきっかけがあつたのか？ひよつとすると吹奏楽部で演奏した「星条旗よ永遠なれ」に違和感を感じたのか、突然英語を「敵性語」というような解釈を持つに至つてしまったことがある。

そのことが直接の原因かどうかは分からないが、英語をないがしろにするようになっていた。

思えば、今は考えられないほど、多感な時期を過ごしていたのだつた。

あらためて、何も希望を失っていた訳でない。

小学校高学年の頃は、酒井三郎さんのような存在への憧れは強く、やはり大空を目指したに違いない。

そして、「遙かに仰ぐ富士の嶺　ま近に望む酒匂川・・・励む心は新しく　空の小鳥の澆刺と」と唄う足柄小学校の校歌に、わが高みを目指さんとした往時の心をしみじみと思ひ出す。